

Title	祝辞
Sub Title	
Author	田中, 千禾夫(Tanaka, Chikao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.329- 331
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0329">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0329</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新聞の「コクトオの世界」は実に美事なものであった。朔さんのコクトオ論、コクトオ観はそこにおいて昇華したような感じがした。

かと思わざるを得ない。これで彼は今後、あらゆる仮面、仮装を脱ぎすてて、詩人らしく真に生き続けることができることであろう。

コクトオは詩人として晩年にいたるまでキザと思はれるくらい若さということを大切に、その作品においても、その生活においても、こどもらしい新鮮な驚異とか感激を失わないようにつとめていた。……

その日、周山街道ですくすくと高くのびている北山杉を見、高山寺で酒を頂き、老師の求めに応じて「よき酒よりもよきものはなし。われ飲む、故にわれ在り」と署名して、生き甲斐を感じ、朔さんの名文を思い出して、酒は益々甘まかった。しかし今から思えば、その日の朔さんはなんとなく沈んでいたようであった。

コクトオが死んだと聞いて彼もついに生の裏側にはいり、彼の好きなイマージュを借りれば、鏡の中をつき抜けて、真にポエジーの充溢する黄泉の国の住人になった

## 祝 辞

田 中 千 禾 夫

このところ佐藤君ともだいぶ会はないが、春頃であつ

たか、紀伊国屋ビル地下の食飲街の店で、宵の口、食事を

していたら、入る店を物色している顔付きの彼を中から見かけた。お仲間がいるようであった。声をかける暇もなく行ってしまった。呑む話は聞いたことがないが、教授たちの屯する小さな穴があるらしいから、そこに行くところだったのかもしれない。先日、健吉君と周作君とに連れられて行ったところが銀座の何とかという酒場で、三田の人が行きつけらしいので、佐藤先生もきますかときいたら、おいでになりますとのことであった。中婆さんの多いバーであった。

こんな下らん話をし出すのも、この雑文を書く切っかけを作るためで、裏話めいたことを書いて友達振りを發揮するつもりはない。学生時代の彼は、勤勉でそしてもちろん冴えた頭の持ち主で、またフランスの新しい詩の感覚を自分の物としていたし、自ら詩作をしたかどうかまではわからないが、とにかく、その頃から芝居の方に頭を突っこみ怠け勝ち（芝居がなくてもそうだったろうが）の私など頭が上らなかつたし、いささか煙たい存在でもあった。

文学者と優等生とが両立し得るとすれば、それはそれなりに苦勞もあることと察せられるのだが、その調和一体が佐藤君なのである。

とにかく元氣らしいのでなによりだと思ふ。私もビール一本ぐらひはつき合えるから、いつか一緒にのみたいものだ。慶応にもたぶん定年があるのだろうが、まだまだ精出してもらいたい。どうも三田の仏文科は早死にする人が多い。私たちの頃は卒業生の数も片手の指でこと足りるほどだから目に立つのかもしいないが、三十数年を経た今でも、その人たちの面影が眼にうかぶ。また私たち同期五人のうちでも一人は既に鬼籍に入っている。群馬大の除村君は自動車で大怪我をしたが今では元氣らしい。小松君はずっと絵をかいていて年に一度は展覧会の案内をくれる。佐藤君は、今、何を教えているのか知らないが多勢の学生を相手に骨の折れることだろう。やはり女子が多いのかな。御自愛を祈る。

佐藤君はたしか東京の産である。今の東京ではない。明

治・大正のそれである。その気性には、江戸人的な、都会的な洗練さがある、私など田舎漢とは自ら異なる肌合いであった。これはフランス文学とウマの合う肌合いである。本名を勝熊という。恐らく、熊と仇名された露西亞に勝ったから、お父さんが命名されたのがあるう。還暦記念

## 佐藤君の思い出

佐藤朔君は開成中学でも一年以上級生であったし、塾の仏文科でも一年以上であった。

ずいぶん永い馴染みである。私の中学の卒業生は、私で終りになったが、堀田周一、平野義太郎、小松義雄、佐藤朔と続いて毎年、塾の仏文科に入った。だからそういう連中を除いて、私は仏文関係ではもっとも古い馴染みである。

というから、敢て私の推察を附け加えておく。朔の他に、彼の好きな詩人の名を漢訳した洒落た筆名があった筈である。

蕪筆を弄して祝辞に代えることをお許しいただきたい。

## 蘆原英了

佐藤君は開成中学時代、天才詩人として名を知られていた。当時、鈴木三重吉の「赤い鳥」という童話雑誌があった。北原白秋選で童謡が募集されていた。毎月一編の推薦作品が掲載されたものであるが、この推薦になると、二度とは難事中の難事であった。ことに一度推薦になると、二度またその栄に浴するということは、ほとんどあり得ないことであった。ところが佐藤君は、たしか二度推薦になっ